

国士舘大学審査学位論文

「博士学位請求論文の内容の要旨及び審査結果の要旨」

「インドネシアの国民形成期におけるカルティニの思想と
その政治ー日本の津田梅子との比較を手がかりとしてー」

ミヤ・ドゥイ・ロステイカ

氏 名 ミヤ ドウイ ロスティカ
学位の種類 博士（政治学）
報告番号 甲 第36号
学位授与年月日 平成28年3月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
学位論文題目 インドネシアの国民形成期におけるカルティニの思想とその政治的役割 —日本の津田梅子との比較を手がかりとして—
論文審査委員 (主査) 教授 柴田 徳文
(副査) 教授 鈴木 裕之
(副査) 教授 砂田 恵理加

インドネシアの国民形成期におけるカルティニの思想とその政治的役割
—日本の津田梅子との比較を手がかりとして—

ミヤ・ドウイ・ロスティカ

要 旨

19世紀後半の東アジア諸地域は西欧帝国主義列強の進出によって、その伝統社会が根本から揺り動かされる大変動の時代を迎える。各地域では、民族意識が覚醒し、新たな国民国家の創造に向けて多様な運動が呼び起こされていく。本論文では、19世紀末から20世紀初頭のオランダ領東インドという植民地国家において書かれたカルティニの手紙（書簡集）の分析を行うことによって、彼女が果たした役割についての再評価を試みた。現代のインドネシアにおいては、彼女の評価は女子教育の先駆者に限定することが主流となる傾向がある。

しかし、オランダ語を自由に読み、書きできた彼女は、当時のヨーロッパの自由主義思想の影響の下で自分が属する「原住民」社会の状況を客観的に観察する中で自らの思想を形成していった。彼女が対象とした内容は（１）女子教育、女性地位の向上（２）ヒンドゥー・ジャワの伝統と慣習（３）西欧近代思想とオランダの植民地主義（４）イスラム教の女性観等、非常に幅広い。彼女がとくに女子教育重視したのは、祖国（原住民社会）の近代的発展を強く願ったからに他ならない。彼女の思想の中に、インドネシアにおける民族主義意識の誕生と呼べる内容を見出すことができる。

植民地国家の中でヨーロッパ人学校の小学校に通ったカルティニに対して、同じような時期に幼少の頃からアメリカに留学した日本における女子教育の先駆者である津田梅子との比較—その共通性と異質性—を試みることによって、客観的な視点でカルティニの評価を行うことが当論文の目的である。

1. インドネシアの歴史的背景

現代インドネシアの国土は、西はスマトラ島から西部はパプア州（ニューギニア島西部）に至る東西 5200km という広大な領域に広がる。インドネシアは世界最大の群島国家であり、350 以上の民族を抱える世界有数の多民族国家である。この地域は、他の世界にない多様な自然物産に恵まれていたため、海が穏やかなジャワ海を中心に中国やインド西方世界を結ぶ通商路（海のシルクロード）として世界の文明の交流地でもあった。そのため、紀元前 2～3 世紀にはドンソン文化が伝えられ、紀元後にはインド文明が伝えられて、各地に王国が誕生するようになる。しかし、オランダによる支配を受ける以前のこの地方—東インド諸島—はひとつのまとまった国で統一されていた訳ではなかった。この地方は当時まだ多様な伝統的政治権力による分裂した状況にあった。

当論文で取り上げるカルティニが誕生したジャワ島ではジャワ島以外の外島が自然環境が厳しかったのに対して、土地が豊かで稲作にも適していたため、古マタラムやマジャパヒト等高い文明を築いたヒンドゥー・ジャワ古代王国が

繁栄した。14・15世紀にはイスラムの流入により、イスラム・マタラム王朝がヒンドゥー・ジャワの伝統の強いジャワの内陸部（コタグデ）に誕生する。しかし、このイスラムはペルシアやインドで体系化されたスーフィズム（イスラム）神秘主義であったため、それ以前のジャワ・ヒンドゥーの理念とも容易に結びつく形で重層的に受けとめられ、ジャワの古代王国はさらに多様な発展を遂げていく。そのため、オランダの植民地支配派ジャワ島を中心に展開していくこととなる。

2. オランダの植民地支配

イスラムのジャワ進出とほぼ同時期、インドネシアの各島々ではポルトガル、スペイン、イギリスといった西欧（キリスト教）の力が及ぶようになる。17世紀初頭に入ると、オランダ東インド会社（VOC）がこの地域全体の交易の独占を目指して、この地域を間接的に支配するようになる。

しかし、19世紀に入ると VOC が植民地経営の失敗で破産したため、オランダ本国による直接的な植民地経営に転換された。1830年代に始まったオランダの植民地政庁による強制栽培制度と徴税請負制という収奪体制はジャワの農民に苛酷な労働を強いた上、彼らをさらに貧困な状態に追い込むこととなり、農民層からの反対運動が激化するようになる。

このよう中で莫大な利益を得たオランダは、ジャワの北部海岸の植民地都市（バタヴィア—現ジャカルタ、スマラン、スラバヤ等）を中心に道路、鉄道、住宅街の整備を行った。また、オランダ本国は、VOC が交易の独占を図っていた全域を直接に植民地として支配することにより、オランダ領東インド帝国の成立を目指した。この植民地国家完成の過程は、ヒンドゥー・ジャワ王国の伝統の強い内陸部と国際主義性格の強い北部海岸地方という 2つの異なった政治的・文化的世界を解体し、オランダ領東インド帝国という新しい政治空間に再統合するという過程であった。この空間で始まった人々の移動・交流・文化の流通は、オランダ語で **modern**（モデルン）と呼ばれた新しい時代のスタート

であった。しかし、オランダによる支配の下にあった原住民は強制労働と極貧の状況に置かれたままであった。

19世紀の後半、ヨーロッパで自由主義の風潮が広まるようになると、オランダの植民地政策に対する批判が強くなる。その結果、20世紀に入るとそれ迄よりは原住民に植民地政策の範囲内で一定の配慮が行われる倫理政策に転換される。しかし、農民の困窮した立場には本質的な変化はなかった。それにもかかわらず、この倫理政策の登場は、結果としてオランダの意図（植民地体制の安定と強化）とは全く逆の方向でインドネシアの民族意識を目覚めさせる機能を果たすことになる。まさに、この歴史的な大転換期に、その役割を果たすもつとも適した存在として登場したのが、ジャワの貴族の娘であったラデン・アジュン・カルティニという少女であった。

3. 19世紀末オランダ領東インドにおけるカルティニの思想

カルティニについては、カルティニの手紙は、アベンダノンの編集によるカルティニ書簡集『暗闇を通して光へ』を中心に 86 通の手紙に表れた主張（思想）を項目別に分類し、分析を行った。

- (1) カルティニと西欧近代自由主義思想
- (2) カルティニの女性観とジャワの伝統社会
 - ① カルティニと結婚観ジャワの因習
 - ② カルティニの女性観とジャワの慣習
 - ③ カルティニの女性観とイスラム
- (3) カルティニの思想とオランダの植民地支配
 - ① カルティニと西洋自由主義思想
 - ② カルティニとオランダ倫理政策
 - ③ カルティニのオランダ植民地主義
 - ④ カルティニの祖国観
- (4) カルティニの女子教育観

- ① カルティニとジャワの女性の置かれた状況
- ② カルティニの女子教育観
- ③ カルティニと女学校の設立

4. 19世紀の日本における女子教育と津田梅子の思想

欧米帝国主義列強からの強い圧力と植民地化への恐怖の下で、西洋型の近代国民国家の形成を目指して動き出した明治期の日本にとって、その独立を保ち、発展を遂げていくためには何よりもまず「富国強兵」を実現することが重要な政治目標となった。そして、それを実現するためには国民の形成とその質の向上を図る必要があった。そのため、明治政府はいち早く教育制度の改革を実施し、国民の義務教育制度を採用したのである。

明治新政府は当初から女子教育の必要性を認識していた。そのため、女子もまた男子と同じように学校教育を受けるべきだという考え方は、義務教育制の採用決定時から法によって明記された。

このような女子教育観が誕生した背景には、当時アメリカを視察した黒田清隆がアメリカ女性の高い地位とその教育環境に恵まれていたことに大きな感銘を受けたことが強く影響していたといわれる。そのため、黒田は政府に女子留学を欧米へ送ることを提案した。その選ばれた5人の女子留学生の中に最年初の津田梅子がいた。

本論文ではインドネシア領東インドと日本という遠く離れた全く異なる世界で生まれたカルティニと津田梅子は、日本とインドネシアにおける女子教育の先駆者として両国において高い評価が与えられてきた。19世紀後半という東アジアの国民形成期における西欧教育の洗礼を受けた彼女達の比較を行って、カルティニがインドネシアの社会においてどのような役割果たしたのかについて明らかにする。

津田梅子に関しては、カルティニの検討項目に対応する内容で津田梅子の思想とその背景について分析を行った。

- (1) 津田梅子のアメリカ観
- (2) 津田梅子の祖国（日本）観
- (3) 津田梅子の宗教観
- (4) 津田梅子の女子教育観

5. カルティニがインドネシアの国民形成期に果たした役割とその評価

—津田梅子との比較を手がかりとして—

カルティニがインドネシアの国民形成期にどのような役割を果たしたのかについては、現在のインドネシアにおいてもその評価をめぐって論争が行われている。カルティニはインドネシアにおける婦人解放や女子教育の先駆者として国家の英雄であるとして建国以来高く評価されてきたにもかかわらず、近年、その評価に対して、イスラムの団体やジャワ以外の地方からインドネシアの独立にカルティニが直接大きな貢献をしていないとして批判的な声が出るようになってきている。本章では、以下の内容でカルティニの実績について分析を行った。とくに、カルティニと同時代の日本における女子教育の先駆者である津田梅子との比較を通して、客観的な分析を試みた。

その主要な内容は以下の通りである。

- (1) カルティニ批判の内容の検討
- (2) 女子教育と婦人解放に対するカルティニと津田梅子の思想上の共通性
- (3) 女子教育と婦人解放に対するカルティニと津田梅子との実績の比較とその評価
- (4) オランダによる植民地支配の中でカルティニが果たした役割
- (5) カルティニに対する総合評価

以上の分析によってカルティニはインドネシアにおける女子教育及び婦人解放の先駆者として十分な功績があることを明らかにした。

また、カルティニがジャワ人という枠を超えて、オランダによって支配されていた東インド全域の「原住民」の全体をひとつの民族という意識からオラン

ダの植民地主義を批判することに至ったことを分析した。このことでカルティニがインドネシアにおける民族意識の覚醒の先駆者と呼ぶに相応しいことを明らかにした。

氏 名 ミヤ ドゥイ ロスティカ
学位の種類 博士（政治学）
報告番号 甲 第36号
学位授与年月日 平成28年3月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
学位論文題目 インドネシアの国民形成期におけるカルティニの思想とその政治的役割 ―日本の津田梅子との比較を手がかりとして―
論文審査委員 (主査) 教授 柴田 徳文
(副査) 教授 鈴木 裕之
(副査) 教授 砂田 恵理加

博士論文審査結果の要旨

学位論文題目

インドネシアの国民形成期におけるカルティニの思想とその政治的役割 ―日本の津田梅子との比較を手がかりとして―

氏 名 ミヤ ドゥイ ロスティカ

博士論文審査要旨

論文題目：インドネシアの国民形成期におけるカルティニの思想とその政治的役割
—日本の津田梅子との比較をてがかりとして—

著者：ミヤ・ドウイ・ロスティカ (Mya Dwi Rostika)

論文審査委員：柴田徳文、鈴木裕之、砂田恵理加

1. 本論文の構成

本論文は、19 世紀末から 20 世紀初頭のオランダ領東インドという植民地国家において書かれたラデン・アジェン・カルティニ（以下カルティニ）の手紙（書簡集）の分析を行うことによって、彼女が果たした役割についての再評価を試みたものである。現代のインドネシアにおいては、彼女の評価は女子教育の先駆者に限定することが主流となる傾向がある。しかし、オランダ語を自由に読み、書きできた彼女が、当時のヨーロッパの自由主義の影響の下で批判を行った対象は、ヒンドゥー・ジャワの伝統、オランダの植民地主義、西欧の価値観、イスラム教の女性観等、非常に幅広い。彼女が女子教育重視したのは、祖国（原住民社会）の近代的発展を強く願ったからに他ならない。彼女の思想の中に、インドネシアにおける民族主義意識の誕生と呼べる内容を見出すことができる。

植民地国家の中でヨーロッパ人学校の小学校に通ったカルティニに対して、同じような時期に幼少の頃からアメリカに留学した日本における女子教育の先駆者である津田梅子との比較を試みることによって、客観的な視点でカルティニの評価を行うとするものである。

本論文の構成は以下の通り。

はじめに —問題意識の所在—

第一部 19 世紀末オランダ領東インドにおけるカルティニの思想

第 1 章 19 世紀末のオランダ領東インドとカルティニの誕生

第 1 節 インドネシアにおけるジャワの政治的位置とジャワの古代王国

第 2 節 オランダ領東インド帝国の成立とその政策

第 3 節 ジャワ社会の歴史的変容とカルティニの誕生

第 2 章 カルティニの手紙とオランダ

第 1 節 植民地主義政策の転換とカルティニ

第 2 節 カルティニとオランダ倫理主義の交流

第 3 節 カルティニの書簡集の出版について

第 3 章 カルティニにおける祖国観

- 第1節 カルティニとヒンドゥー・ジャワ的伝統
- 第2節 カルティニとイスラム
- 第3節 カルティニの結婚観
- 第4章 カルティニの思想とオランダ植民地政策
 - 第1節 カルティニと西洋近代思想
 - 第2節 オランダの植民地主義とそれに対するカルティニの批判
 - 第3節 カルティニとオランダ倫理政策
- 第5章 カルティニの女子教育観
 - 第1節 オランダ領東インドにおける教育事情
 - 第2節 ジャワ女性とその社会における地位
 - 第3節 カルティニと女学校の設立

第二部 19世紀末日本における津田梅子の思想

- 第1章 津田梅子のアメリカ留学の背景
 - 第1節 明治期における女子教育政策
 - 第2節 明治新政府の女子留学事業
 - 第3節 津田梅子のアメリカ留学の背景
- 第2章 津田梅子の思想
 - 第1節 津田梅子の日本観
 - 第2節 津田梅子の宗教観
 - 第3節 津田梅子の結婚観
- 第3章 津田梅子の女子教育観
 - 第1節 津田梅子から見た日本女性
 - 第2節 津田梅子の女子教育観
 - 第3節 津田梅子と女子英学塾の設立

結論 津田梅子との比較を通して見たカルティニの評価

- 第1節 現代インドネシアにおけるカルティニの位置づけに対する論争
- 第2節 女性の地位をめぐるカルティニの思想と行動—津田梅子との比較を通して—
- 第3節 カルティニと民族意識の芽生

参考文献

2. 本論文の概要

まず著者は、「19世紀後半の東アジア諸地域は西欧帝国主義列強の進出によって、その伝統社会が根本から揺り動かされる大変動の時代を迎え、各地域で民族意識が覚醒し、新たな国民国家の創造に向けて多様な運動が呼び起こされていったという背景のもとで、19世紀

末から 20 世紀初頭のオランダ領東インドという植民地国家において書かれたカルティニの手紙の分析を行うことによって、彼女が果たした役割についての再評価を試みたことを述べる。現代のインドネシアにおいては、カルティニの評価は女子教育の先駆者に限定することが主流となる傾向があるが、カルティニが当時のヨーロッパの自由主義の影響の下で批判を行ったその対象は、(1) ヒンドゥー・ジャワの伝統 (因習) (2) オランダの植民地主義 (3) 西欧の価値観 (オリエンタリズム) (4) イスラム教の女性観等、非常に幅広く、彼女が女子教育重視したのは、祖国 (原住民社会) の近代的発展を強く願ったからに他ならなかったため、彼女の思想の中に、インドネシアにおける民族主義意識の誕生と呼べる内容を見出すことができると考える。そこで植民地国家でヨーロッパ人学校の小学校に通ったカルティニに対して、同じような時期に幼少の頃からアメリカに留学した日本における女子教育の先駆者である津田梅子との比較を試みることによって、客観的な視点でカルティニの評価を行うとしている。

そして本論文を 2 部に分け、第 1 部においては、19 世紀末オランダ領東インドにおけるカルティニの思想、そして第 2 部においては、19 世紀末日本における津田梅子の思想をそれぞれ分析する。

第 1 部においては、第 1 章でカルティニの思想形成の背景となったインドネシアの歴史的発展をジャワの政治的位置と古代王国の興亡、オランダ進出による植民地支配の確立、そしてそれによるジャワ社会の変容を概観し、カルティニの生まれたジャワ社会の特徴を指摘する。第 2 章においてカルティニが成長した時期のオランダの植民地政策の状況を明らかにする。オランダ領東インドの住民の福祉のため道徳的な政策を採用することが提案され「倫理政策」の考え方が主張され、それにより村落学校や診療所などが建設された。教育分野において、初等教育を中心として教育拡充の方策がとられオランダ人原住民の学校が各地に設立された。この学校は植民地における学制の始まりとなった。しかし教育政策が転換された最大の理由は植民地政策を遂行することにより大きな利益を上げるために役人の数を増やす必要に迫られたということであった。ジャワのプリアイ階層は学校教育や日常生活を通じてオランダ語とオランダ風の生活様式を盛んに取り入れるようになった。カルティニは 1885 年、ジュバラにあるヨーロッパ小学校に入学した。第 2 節で著者は、カルティニとオランダ倫理主義派の人々との交流を検討する。本章第 3 節において今日出版されているカルティニの書簡集を収集し整理をしている。それらは、オランダ語版のもの、英語版のもの、ムラユ語、アラビア語、スダ語、ジャワ語、インドネシア語、日本語のものである。

第 3 章において著者は、カルティニの祖国観の検討を行っている。まず、第 1 節でヒンドゥー・ジャワ的伝統文化、特にジャワ貴族社会の慣習である「ピングタン (婚前閉居)」生活について、強く批判していることを明らかにしている。カルティニは別の手紙ではジャワの伝統的な悪しき慣習が自分達民族の発展を阻害していることに誰も気付かないことを強く批判する。プリアイ階層に根付いた慣習が上流階級だけのための自己中心的なもの

であって社会（祖国）の発展にとって大きな障害だと考え、彼女自身はそれを取り除くための闘いを決意している。しかしカルティニはジャワの伝統工芸を高く評価した。1898年にカオランダで行われた「女性勤労全国博覧会」に芸術作品を出品した。カルティニは当時の人々から「西洋かぶれ」として批判される傾向が強かったが、ジャワ社会には強い愛着をもっていた。また、カルティニはジャワの一般庶民の生活態度と魂がヨーロッパ白人社会の庶民に比べるとはるかに詩的で美しいものであり、礼儀正しい存在であると強調している。カルティニは様々なオランダ人との接触の中で祖国に対する愛着を強めることとなった。イスラムについてカルティニは、信仰はしているが数多くの批判を展開している。宗教の仮面をかぶった人々が、愛の精神をもたずに行動する姿を、余りにも多く見せつけられたため、そのことがカルティニを宗教から背けさせた原因だという。カルティニはジャワ人に宗教を教えようとするなら、キリスト教徒、イスラム教徒、仏教徒、ユダヤ教徒を含めた全ての人間に共通する唯一の神を知ることにあると述べる。結婚について、カルティニはピンギタンの制度によって女性を男性の所有物として人間として認められないことに強い怒りを持った。カルティニは結婚が「男性と女性と平和な、調和の取れた共同生活」にあると考えたが、それは現実の結婚制度とはほど遠いであったものであった。彼女はイスラム教の「一夫多妻」の掟に対しても強い批判を行う。カルティニから見ればそれは、女性が聡明さと知識をもたない無知な存在であるためであり、言い換えれば女性に教育がないためにこのような悪習がいつまでも続くのである。

第4章において、カルティニの思想とオランダ植民地政策とのかかわりについて説明されている。カルティニはオランダ教育を受けたことで西欧の知識教育の重要性を理解し、倫理派のオランダ人達の新しい自由思想に大きな共感をよせていた。カルティニは無知と戦うために一般の原住民に対しても教育を与えられねばならないと考えていた。

カルティニは、西欧の近代的自由主義の思想が、ジャワ社会のどうしようもない旧弊、イスラムの制度、封建的な貴族制度に覚醒を与え、進歩を促すための大きな可能性を持っていることを理解していた。彼女は、オランダ語の新聞、雑誌、本を通じて19世紀末のヨーロッパにおける新しい自由主義思想や女性解放思想の大きな影響を受けた。

カルティニはオランダ教育を受けたことで西欧の知識教育の重要性を理解し、倫理派のオランダ人達の新しい自由思想に大きな共感をよせていた。彼女は無知と戦うために一般の原住民に教育が与えられねばならないと考えていた。しかし、彼女は帝国主義的な人種差別の強い西欧思想に対して、批判的な態度をとっていた。

第5章でカルティニの女子教育観が検討されている。カルティニはオランダの文献を読むことによって、世界に関する知識のキーワードが「言語」であることに気づいた。言語取得によってジャワ人がオランダ人と同じ立場になれるのではないかと考えた。カルティニが受けたそれまでのオランダ式教育は彼女の思想の形成に大きな影響を与えた。このピンギタン生活の中でカルティニが受けた伝統的な教育価値観とオランダ式教育による西洋化が大きく衝突した。ここでカルティニは自分の経験を基にして、ジャワの女性の教育を考えはじ

めた。ジャワ人を教育するために先にやるべきことは上流階級を教育するべきである。女性には子どもが会う最初の指導者である。社会で活躍する人達を生み出すためにはまず母親の教育が必要である。そのために母を教育するべきであると考えた。1903年ジュパラの知事邸に設立された学校は、オランダ領東インドにおける最初のジャワ人女学校となる。女学校の教育方針はカルティニの考えに基づいて行われた。彼女の教育方針は、知的教育よりも道德教育をより重視した。1903年7月半ば、女学校が設立された直後、オランダ留学を諦めたカルティニは、父の薦めでレンバンの知事の結婚申し出を受け入れた。彼女の結婚後ジュパラの女学校は妹に委ねられた。カルティニは1904年9月13日に出産した4日後の17日に突然死亡した。

第二部においては津田梅子の思想が検討されている。第1章において津田梅子のアメリカ留学の背景が説明されている。江戸時代において、「藩」という意識があっても国家意識や国民としての自覚はなかった。国家に所属する国民としての自覚が不可欠であった。近代日本の教育は近代化を推進するための異文化受容と国家統合に必要な国家意識を持った国民の育成でスタートし文部省が設けられ、「学制」が公布され、女子が男子と同じように学校教育を受けるべきだという考え方が明記された。教育における女性の地位を主張している。これに加えて、男女の区別なく小学校義務教育を実施することの重要性を述べている。明治12年までの学制期には、女子教育の欧化が奨励され、英語教育を主とした女子教育施設も多く設置された。この時代における女子教育は、高等小学教育までが前提となっていた。「学制」が公布される前から、明治新政府はすでに女子教育の必要性を認識していた。これは「学制」施行に先立って行われた5人の女子留学生の派遣の事業にみられた。この事業は北海道開拓使の事業の一つであった。新政府は、1870年(明治3年)に官費によって10年間という長期のアメリカに留学する少女達を募集した。募集に応じたのは上田悌、吉益亮、山川捨松、永井繁、津田梅の5名であった。津田梅子は最年少であり、アメリカに出発したときには6歳であった。梅子は郊外のジョージタウンの日本弁務使館書記官チャールス・ランマンが預かった。梅子はコレジエト・インスティテュートに入学した。1878年(明治11年)梅子は13才でスティブソン・セミナリを卒業した。秋にはアーチャー・インスティテュートに進学した。梅子は日本に帰国した時、言葉が通じず、日常生活の習慣全てが違うことなどで日本社会に順応するのに困難を覚えたようである。しかし、彼女にとって何よりも困った問題は仕事が見付からなかったことであった。当時の日本では上流層の女性の仕事は非常に限られていたのである。第2章では津田梅子の思想が検討されている。日本では文明開化(西洋化)が進んだが上流階級にしか浸透していなかった。梅子は日本の文化、自然、礼儀作法、服装などについては高く評価をしていた。梅子は自分を意味する表現として「外国人の眼」と書いていた。それは、彼女が日本人ではなく外国人であることを意識していた表れでもあった。梅子はアメリカ社会では男性が女性に対して日本に比べるとはるかに親切であるとアメリカを評価していた。しかし、一般的には日本の礼儀正しさの方がアメリカよりも優れていると梅子は誇りに思っていたと

手紙に書いていた。梅子は国費留学生としてアメリカに派遣されたからには、国のために何か恩返ししなければならないと考えていた。彼女の日本に対する祖国の強い思いを確立させたのは自分をアメリカに留学させてくれた明治政府に対する恩返し（責任感）からなるものと考えられる。しかし、このような責任感とは別に、梅子が祖国の日本の自然や文化への愛着が心の奥底にあった。津田梅子にとって、日本は全ての点でアメリカ的基準から見て劣っていた。とりわけ梅子の関心の対象は日本女性の置かれた状況にあった。梅子は日本に止まって女子教育者としての道を歩むことを選択する。津田梅子はクリスチャンであった。梅子は日本におけるキリスト教徒の立場について不安を感じていた。日本社会ではきっとクリスチャンとしての梅子を受け入れられる環境にないものと予想していた。明治期の西洋化の中で日本ではキリスト教の信者が少しずつ増え始めていた。しかし、宣教師は日本語だけではなく、日本の文化も勉強せずに、日本人に対して人種差別的な態度を強く持つ者が見られた。また、アメリカに帰った宣教師が日本の悪口や間違った情報をアメリカに広げる原因を作った。梅子は彼女と接触した多くの宣教師達が日本人である彼女に軽蔑的態度を取って見下したことに強く失望し、強い調子で彼らを非難している。日本人であった梅子は他のアメリカの子供達より比較的客観的にキリスト教を見る立場にあったとも考える。そのため、梅子の言動あるいは思想はキリスト教に反するところが多いと他のクリスチャンには見えたといわれる。

山川捨松が結婚することとなった。捨松の結婚の決意に対して「本当に幸福」であるのかどうかについて疑っていた。梅子は捨松の結婚はどうしても恋愛結婚とは思えなかった。梅子は捨松の結婚が幸福ではなく、社会的地位、富、権力が決め手になったであろうと考えた。梅子の結婚観は恋愛結婚が基本であり、御見合い等による日本式の結婚については想像さえできなかった。梅子はそのような結婚をするよりもむしろ、独身でいたいと強く思っていた。独身でいることが家族の負担になり、不孝であるという世間の通念の圧力に負けて「便宜的な結婚」、「強いられた結婚」をしないためには女性は自立しなければならないと考えた。梅子は結婚に対して拒否を示すのではなく、「恋愛無き結婚」を拒否したのである。彼女の結婚観は恋愛結婚が基本であり、そのような相手に出会わないならば、生涯独身で自由に生きた方がよいという考えであった。そしてその自由な時間を日本における女子教育に捧げたいと考えていた。結局、梅子は死ぬまで独身を通すことになる。アメリカ留学から帰国後、津田梅子が身をもって知ったことは、日本における女性の地位の低さであった。また女性には中々仕事が見付からなかったことである。女性が自分の地位の低さに気付かずに、その状況を改善を求めず現状を受け入れていることが問題だと梅子は考えた。帰国1年後の1883年（明治16年）梅子は伊藤博文と再会した。伊藤は梅子に若い教育者として有名であった下田歌子（当時29歳）を紹介した。直ちに梅子のポストを用意するという内容であった。仕事がもらえたらアメリカでの留学という明治政府によって彼女に与えた負債を返済できそうだと梅子は喜んだ。伊藤は歌子に梅子を英語の教師に採用するように求めたのである。伊藤は梅子を翌年、創立される華族女学校に推薦し

た。こうして帰国から約3年後、やっと念願の仕事をする事ができた。ようやく国への恩返しができ、また、留学前に皇后から授かったお沙汰書に書かれた約束を果たすことができた。梅子が華族学校で教えている頃から、日本では女子教育や女性の地位などの女性問題が社会の中で大きな関心を集めるようになっていく。女性問題のための集会在開かれるようになり、梅子が属する日本婦人教育会ではそのテーマで週1回の集まりをもつようになる。梅子は人形のように可愛い、知的好奇心があまり高くない華族学校の学生に失望した。彼らに知性が加えれば、日本女性を指導できるという梅子の期待は裏切られた。1889年梅子は華族女学校に在官ままプリンマーカレッジに2年の予定で留学へ出発した。この再度の留学期間では梅子は新たに自分の目標を決意した。それは、日本における女性の地位の低さに対して女子の高等教育の開拓をしないといけない、梅子は自分の生涯の事業は、その分野にあるのではないかと考えた。梅子は明治維新以来、飛躍的な発展を遂げた男子教育に比べて、女子教育はほとんどといっていいほど開けていないこと、時代につれて女性も変らぬならないこと、女性も独立の仕事につき得るだけの教育を受けねばならないこと、幸いなことは女性に男性への盲従的依存を強いてきた仏教と儒教とは衰えて、キリスト教の進出が見られること、この際日本女性に米国で学び得る道が開かれるなら、彼女達は外国人が日本人を教えるよりも、はるかに有能適切な教師となって帰国し、後進の教育に尽くすことができると思うこと、そのためには日本女性が米国で大学教育を受けることが必要と考えていた。さらに梅子は、当時日本に欠けていた2つのことが、キリスト教と教育とであり、女性が男性と同等の教育を受けるのであれば国民の本当の進歩は望みがたいと考えた。1900年、梅子は私塾の設立のため華族女学校の教授を辞職した。桜井彦一郎とともに私学の開校を迎えた。私塾に「女子英学塾」という名をつけた。

結論において著者は津田梅子との比較においてカルティニを評価する。

カルティニと津田梅子は女子教育の先駆者として夫々高い評価を受け多くの点で共通性が見られるが、2人が生まれた祖国が置かれた歴史的状況の違いによって、両者はその後各々の国で異なった役割を果たしていくことになった。ここでカルティニと津田梅子がどのような点で共通性を持ち、またどのような理由で異なった思想を持つに至ったのかについて検討され、そのことによって、カルティニがインドネシア社会においてどのような役割果たしたのかについて考察されている。

カルティニは「女性解放の英雄」としてインドネシア女性のシンボリックな存在となっている。スカルノ大統領はカルティニをインドネシアの国家独立英雄として定め、また1964年に、カルティニを国家独立英雄に列する式典が行われた。また、カルティニはオランダの倫理派と交流があったため、彼女はオランダによって作り上げた英雄とみなす人も多い。

なぜカルティニが他の女性と比べて特別に重要な人物とされているのか。カルティニの女子教育活動の原点である女子教育について、カルティニと津田梅子には、西欧教育を受けることについて家族から応援があったことが共通している。2人とも外国語（オランダ語・英語）のレベルは非常に高かった。また、2人とも19世紀後半という西欧帝国主義全

盛の時代における自由主義思想やその価値観の影響をうけることとなった。西歐式教育を受けた彼女達に、特に大きな影響を与えたのが女性の地位の低さに対する強い意識であった。両者とも自国の女性達が男性に対して一段と低い地位にあることを強く批判した。

このことは同時に自分達の祖国が、西歐に比べて遅れているという認識に結び付いている。女性の地位についての問題は2人にとって大変重要な要素であった。2人とも自分の祖国の男性をこの点においては高く評価していない。カルティニは彼女がもっとも尊敬している開明的で西歐文明の理解者であった自分の父に対してもその女性観に強い疑問と批判を持っていることを友人に宛てた手紙の中で書いている。とくに、一夫多妻というジャワの伝統やイスラムの教義について、カルティニは数多くの強い批判を書き残している。結婚は2人にとっては男女が平等の立場に立った恋愛によって成立しなければならないものであった。それ故に、このような考えをもった2人は祖国の社会では西洋かぶれと見られる傾向にあった。2人にとって、女性の地位を向上させるためには、何よりも女性の経済的な自立が必要となるのである。そして、そのためには女性も男性と同じように教育を受けることが必要とされる。両者とも女性が教育を受けることで社会が発展すると考えた。それが2人が女学校の設立に大きな意味を見いだした理由であった。両者に共通している次の点は、祖国の発展への強い思いである。2人とも自分達の国が西歐に比べて遅れているにも関わらず、祖国の伝統や文化に強い愛着を持っている。2人が白人による人種差別的な態度を強く批判したのも、そのような祖国への気持ちの表れと思われる。とくにカルティニがこの点について何度も強く批判しているのは、カルティニがオランダ領東インドという「植民地の原住民」に対する、支配者オランダ人からの強い人種差別（原住民は猿と呼ばれていた）であった。2人の女性は、その能力において西歐社会から既述した如く、高く評価されたという点で共通している。西歐における「女子教育」や男女の地位についての実情を知った2人にとって、これらの改善は遅れた祖国を発展させるために最も重要なことであった。2人はほとんど同じような思いから女学校を設立することになった。今日カルティニと津田梅子はそれぞれ女子教育や婦人解放の先駆者として、インドネシアと日本で各々高い評価を受けている。とくにカルティニはインドネシアにおいては既に述べたように婦人解放の先駆者として国家英雄の地位を与えられている。カルティニの設立した女学校は、彼女が25才で死去した後わずか数年で消滅した。カルティニと津田梅子との間の根本的な差異は、カルティニの生まれた祖国がオランダ領東インド帝国という植民地であった点に由来するものである。この地では「白人の優越と威信」の下で全ての権力はオランダ人に占められていた。カルティニの家族のようにプリアイとして原住民の最上位に位置する者も、決してオランダ人の上に立つことは許されなかった。また、オランダ人達がこの植民地で1～2年で大金を手に入れて帰国して行ったにも関わらず、オランダ領東インドのことを「おぞましい猿の国」と呼んでいたことをカルティニは強く批判している。また彼女はオランダ領東インド政庁の最大の収入源であったジャワ農民へのアヘンの売買についても強く批判する。カルティニのオランダ領東インド政庁への直接的な批判は、

オランダにとっては衝撃的なものであったと思われる。このようなカルティニの主張の根幹は、カルティニが自己の社会を愛し、その社会を貧困と混乱から、あるいは苦しんでいる原住民をオランダという植民地主義者による人種差別と搾取から解放するための民族主義的な抵抗であったのである。1900年頃まではまだカルティニのように、今日的な理解では民族性と言うものについての意識を持っている者はほとんどいなかった。この点についてカルティニはまさに先駆者であった。カルティニは他の民族指導者達よりも何年も早く、民族の優れた本質、価値、特性、文化などに気付いた。カルティニの書簡集の影響を受けて1908年5月20日にブディ・ウトモと呼ばれる知識人を中心した民族主義団体が誕生した。この団体の設立日の5月20日が「民族決起の日」として制定され祝日になっている。この日がインドネシアの民族（国民）の間に合一の自覚が生まれた最初の時点である。19世紀末から20世紀初頭というインドネシアがまだ植民地下の暗黒の時代のなかで、将来の「インドネシア」民族の自立を夢見たひとりの少女カルティニの存在は、男女の性別を越えてまさにスカルノが高く評価した通りその先駆者としてインドネシア人の誇りである。「闇」「暗黒」「夜」という言葉の意味するものを、カルティニはオランダの植民地支配として闘ったのである。カルティニが求めた光は「女子教育による女性の解放」であり、「原住民の民族意識の覚醒」であり、「独立達成」であると思われる。その意味ではカルティニが求めた光はインドネシア共和国の誕生によってまだ充分ではないとしても基本的には実現したといえる。「夜は終わって、朝日が昇った」のである。カルティニの女学校は結局形として残ることはなかった。しかし、その努力の中で学校を設立すること以上のものを彼女はなし遂げた。それは、既に何度も述べて来たインドネシアにおける「民族意識の覚醒」である。カルティニは、学校設立自体を目的として活動したのではない。ジャワ伝統社会の中において、女性として生きることから生ずる矛盾・困難、あるいは不平等を体験し、それを克服しようとしたのである。彼女は父親の理解という僥倖に恵まれ、教育を受けることができたが、その幸運を自分だけのものとすることなく、同じような環境の中に取り残されている同胞に広めようとしたのである。学校を作るという目的は死によって達成されなかったが、彼女のこの希望は、インドネシアの中に継承され、民族独立の原動力となった。カルティニは女性自立のための学校教育を行うという点については津田梅子と軌を一にするものがあるが、その後夫々の社会に残したものは別々の形のものとなったと著者は結論する。

本論文の成果と問題点

本論文は、オランダ植民地支配下のインドネシアにおける女子教育の先駆者とされているラデン・アジェン・カルティニの検討を、同じようなアジアでの発展途上地域において女子教育の先駆者であった津田梅子との比較において行おうとするものである。

この論文は、カルティニが置かれていた19世紀のインドネシアの貴族社会を背景としての、

カルティニのヒンドゥー・ジャワ的伝統やイスラムに対する理解と批判、そしてそれらに縛られた結婚をどのようにとらえていたかを検討している。またカルティニが、西洋の近代思想、オランダの植民地主義、オランダ倫理政策をどのようにとらえていたか、また当時のオランダ領東インドにおける教育事情やジャワ女性の社会における地位を検討したうえで、カルティニがどのようにして女学校を設立したかを詳細に紹介しておりカルティニの思想を辿るうえで貴重な研究である。著者はそれを踏まえて津田梅子のアメリカ留学から女子英学塾の設立に至るまでの軌跡をたどることによって必然的に両者間に生じた共通点と相違点を明らかにした。そして結論として、カルティニがインドネシアにおける女子教育の先駆者であるばかりではなく、インドネシアの民族意識の覚醒者であることを明らかにしたのである。

しかしながら本論文においては課題も多く残されている。まず全体として繰り返しや本論とは関係があるように思えない情報が多く、本論を追うのが難しいことがある。また本論の主人公であるカルティニが書き残したオランダ語の原文を資料にしていない点は残念である。「定訳」とされるものがあつたとしても、訳もひとつの解釈であり訳者の視点が入るので、カルティニの生の言葉を追うにはやはりオランダ語の資料を読むべきだったろう。先行研究の把握も、やや甘い印象を受ける。津田梅子が女子教育を学校設立・発展という形で実現させたのに対し、カルティニは女子教育を出発点としながら、最終的にはインドネシアの民族的覚醒という部分で大きな影響力を持った。その点は結論の最後の部分で触れているが、その違いを日本とインドネシアの歴史的・社会的背景に注目しながら、津田梅子とカルティニの比較を通して、より詳細に論ずることができるのではないかと考えられる。そのような不十分な点はあるが、本論文がインドネシアの民族英雄となっている女性について日本・インドネシア双方からの観点で考察が行われた点は高く評価されるもので、著者自身も足らざる点を自覚されているので今後の発展が期待される。

結論 審査員一同は2016年1月7日、1月27日、2月13日の3回審査会を持ち審査を行った結果本論文は当該研究分野の発展に貢献するものと判断して、国士舘大学博士（政治学）の学位授与に値するものと認定する。